

はくびつかん

HIRATSUKA CITY MUSEUM '84 12月号

収蔵資料の紹介⑤

二人の風外 達磨図・人物図



達磨図 作者名 風外慧薰 時代 江戸前期 尺法 33.0×60.1cm

人物図 作者名 風外本高 時代 江戸後期 尺法 30.5×110.2cm

二人の風外

当館は、風外と称する二人の有名な僧の遺墨を所蔵している。一人は風外慧薰（えくん、1568～1654？）といい、もう一人を風外本高（ほんこう、1779～1847）という。いずれも曹洞宗の僧であるが、特に、慧薰は「穴風外」あるいは「真鶴風外」と呼び、幕末期の風外本高と区別している。慧薰は上野国に生まれ、足柄下・上郡の上曾我や真鶴などの横穴を住みかとし、

「人、その画を請い米五升をもって換え」る生活をして、奇行も多かったといわれる。晩年は遠江国石岡の地で小庵を結び、その地で没したという。

本高は、伊勢国に生まれ、但馬竜満寺、大阪の圓通院、三河香積院を歴訪し、その画は筆力奇抜といわれる。当館にある慧薰・本高の作品は、高瀬コレクションに含まれ、慧薰五十五点、本高三点を有する。（学芸員 土井 浩）

1階寄贈品コーナーにて展示中（27日まで）

12月の行事

1 土	プラネタリウム、古文書講読会
2 日	プラネタリウム
3 月	(休館日)
4 火	
5 水	
6 木	
7 金	
8 土	プラネタリウム、土曜観察会 石仏を調べる会
9 日	プラネタリウム、地層観察会
10 月	
11 火	
12 水	
13 木	デッサン教室
14 金	デッサン教室
15 土	プラネタリウム、古文書講読会
16 日	プラネタリウム 体験学習「おかざりを作ろう」
17 月	(休館日)
18 火	
19 水	
20 木	
21 金	
22 土	プラネタリウム、石仏を調べる会 体験学習「星座早見を作ろう」
23 日	プラネタリウム、地層観察会
24 月	(休館日)
25 火	星を見る会
26 水	プラネタリウム
27 木	プラネタリウム
28 金	(休館日)
29 土	
30 日	
31 月	



1月は5日から開館します。
よいお年をお迎え下さい。

★☆行事案内☆★

●星を見る会

博物館の望遠鏡で、冬の夜空の天体を観察しましょう。

「月と金星を見よう」

12月25日(火) 17時~19時

「冬の星座と星雲・星団」

1月18日(金) 18時~20時

参加自由。当日、博物館科学教室にお集まり下さい。また、観察は屋外で行いますので、寒さに負けない服装でおいで下さい。

●自然観察会「押切川西岸をたずねて」

大磯丘陵の西部を訪ね、地質や、冬の雑木林を観察します。

日時 1月13日(日) 9時~16時

(雨天中止)

場所 小田原市小船・沼代方面

申し込み 1月5日までに、往復はがきで博物館までお申し込み下さい。多数の場合は抽せんにより30名までといたします。

●土曜観察会「自然の新聞を作ろう」

1月12日(土)馬入(ハクセキレイのねぐら)

1月26日(土)岡崎(社寺林めぐり)

2月 9日(土)新聞作り(博物館)

参加を御希望の方は、60円切手を同封して博物館までお申し込み下さい。

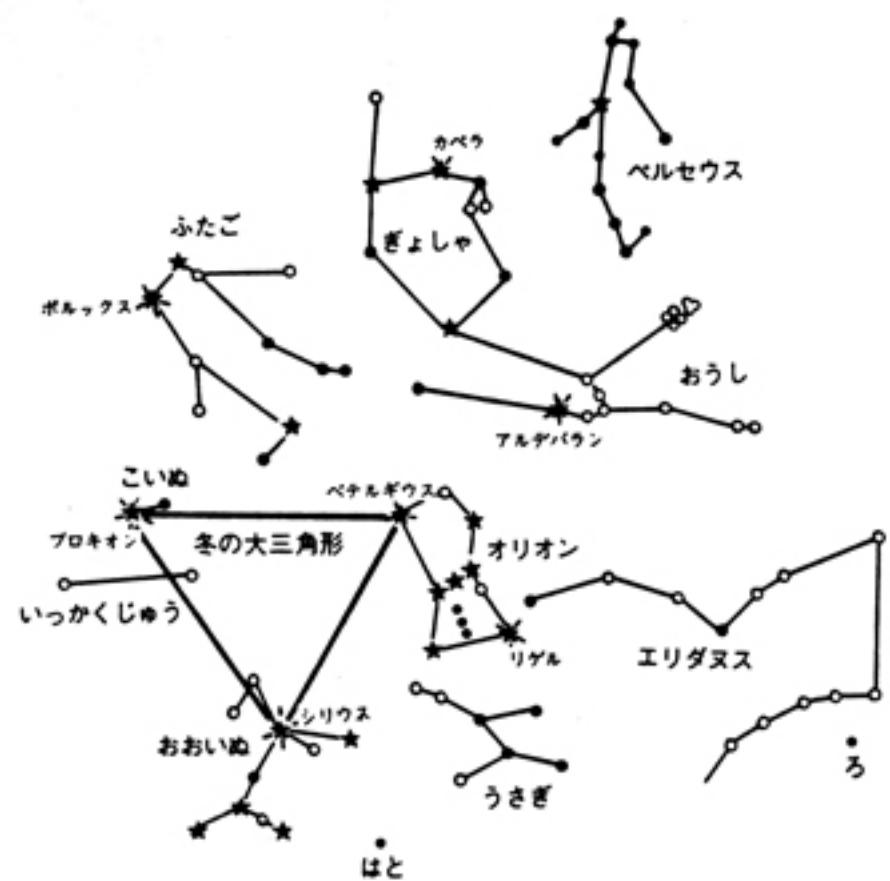
●プラネタリウム「中国の星座」

むかし、中国には独自の星座の体系がありました。そこには彼らの心を占めていた考え方があり、強くじみ出ています。中国の人たちは、星座を、どのように見ていたのでしょうか。

★ ★ ★ ★ ★ ★ 冬の星座を見よう ★ ★ ★ ★ ★ ★

☆ 12月になって、夕方暗くなる時刻が一段と早くなっています。午後6時には星たちが夜空に輝いています。いよいよ星がさえわたる季節です。寒さにまけずに夜空をあおいでみましょう。

☆ ○冬の星座のさがしかた



冬はなんといってもオリオン座が中心です。明るくどうどうとしたすがたは、だれが見ても心にのこります。オリオンが南の空に見えていたら、そのまわりの星たちをたどってみましょう。

オリオンの三つ星を上にのばすと、おうし座があります。その先にすばる星が小さな星をキラキラさせながら光っています。オリオンの三つ星を下にのばすと、白くかがやくシリウスが見つかります。星たちの中では一番明るい星です。冬の大三角形、東の空のふたご座、五角形のぎょしゃ座、みんなにぎやかです。

★ ○星のいろ、いろいろ

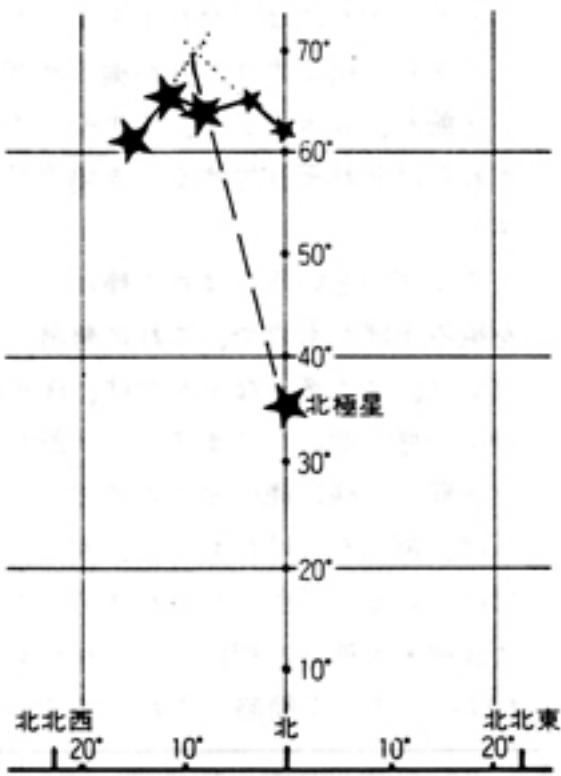
- ★ オリオン座を見ると、ベテルギウスという赤い星が右かたに光り、リゲルという青白い星が左足に光っています。
- ★ この二つはとても明るくはっきりと見

星の色と明るさ		
星(星座)	色	明るさ
ペテルギウス	だいだい	一とう
(オリオン)		
リグル	あおじろ	一とう
(オリオン)		
アルデバラン	だいだい	一とう
(おうし)		
シリウス	しろ	一とう
(おおいぬ)		
カペラ	うす黄	一とう
(ぎょしゃ)		
カストル	しろ	二とう
(ふたご)		
ボルックス	きいろ	一とう
(ふたご)		
プロキオン	しろ	一とう
(こいぬ)		

北の空を見ると
北をさす北極星や
ローマ字のWにに
たカシオペヤ座が
出ています。この
カシオペヤ座から
北極星をさがすこ
とができます。さ
がし方は図のよう
にします。

星空は北極星を
中心にまわります。
カシオペヤはどん
な動きをするでし
ょう。

○北極星をみつけよう



平塚の年中行事

12 おかざり

(最終回)

今年もいよいよ残すところ1箇月となり、これから気ぜわしい日々が続きますが、今回は正月に先んじておかざりについて紹介しておきます。

正月のおかざりは、「おかざり」といっても飾り物ではなく、シメ縄の一種だということはよくご存じのことと思います。正月行事というのは、単に新しい年を迎えたお祝として行われるのではなく、本来は年頭にあたって歳神(としがみ)を迎えて行う祭りで、おかざりは歳神を迎えるのに、この場所は清浄な所であるということを示すためのものです。少し専門的ないい方をすれば、おかざりは歳神が占有する清らかな区域を示す張り縄で、この神を迎え祭るための祭具の一つであるといえるわけです。神とか祭具とか、物々しいい方ですが、たとえば自分の家や親戚で葬式があると、今年はヒがかかっているからおかざりをしないとか、正月をしないといっていることを考えるとよくわかると思います。ヒがかかるというのは、死の穢(けが)れが自分にも及んでいるので、忌(いみ)ごもりの状態にあるということで、おかざりや正月をしないというのは、そのために歳神を迎えることは行わないという意味です。

正月のおかざりの意味は、簡単にいえば以上のようになりますが、平塚周辺で古くから作られているおかざりには、およそ4つの形があります。クミダレ(組ミカザリとか編ミサゲともいいう)、シメ飾り、ゴボウジメ、イチモンカザリの4種でこれらはそれぞれ付けるべき場所が異なっています。

クミダレというのは竹の棒にノレンのように藁を編み下げるもので、これに幣帛、ユズリハ、ウラジロ、ダイダイなどをつけ、歳神を祭る棚や大神宮の棚の前につけます。シメ飾りは、一般的なシメ縄と同様に縄の途中の所どころから藁をない下げ、幣帛をつけたもので、家の玄関口や門口に付けているのが多く見られます。写真のおかざりは歳神・大神宮の棚につけられたものですが、これは組ミダレが簡略化された形で、組ミダレとシ



メ飾りの中間的な形をとっています。

ゴボウジメというのは、よくすぐった藁を直径10cm程に束ね、これを3つ編みして作ったものです。長さは藁1本分の長さで、中央部には藁くずなどを入れて太くし、台所に祀っているエビス様、あるいは荒神様につけるというのが普通です。イチモンカザリ(一文飾り)は、もっとも簡単なおかざりで、6、7本の藁を、根元より3分の1程のところから縄のようになつたもので、途中で2、3本の藁をない加えてさげ、幣帛やユズリハをつけたりして、家の物置、外便所等の入口、屋敷内に祀る稻荷等の屋敷神や井戸(水道)などに付けます。この一文飾りは、棒ジメとも呼ばれ、農家では10本以上つくり、大晦日に鎮守やお墓へおまいりするのに1本ずつ持つていてあげたりもしています。

ここにあげたおかざりは、その年にとれた新しい藁で、30日に作って各場所につけます。大野地区では、この時、藁に餅つきの際の米のふかし水を振りかけておかざりを作るという家もあります。また、おかざり作りは、その家の主人が家の中の座敷にムシロやゴザを敷いて行うというものもありました。

おかざりをはずす日は、おかざりの種類によつて違い、組ミダレは2月1日又は卯の日のオタナサゲ、シメ飾りと一文飾りは4日か7日にはずし、エビス様などに付けたゴボウジメは1年間おいて、翌年新しいのを作ったときに交換します。はずしたシメ飾り、一文飾り、ゴボウジメは、正月14日のセエトバライ、団子焼きで燃し、組ミダレは2月初午の稻荷講のオタキアゲに燃していました。

(学芸員 小川直之)